
幕末異聞 疾風録 5 ~金色の下の出逢い

花衣 悠希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幕末異聞 疾風録5～金色の下の出逢い

【Zコード】

Z9334F

【作者名】

花衣 悠希

【あらすじ】

時は幕末、所は京都。土方歳三から借り受けた「豊玉句集」を十三間堂に忘れてしまった沖田総司は、夜中に藤堂平助と共に探しに行くが、そこで出逢ったものとは。ドタバタ幕末ファンタジー第5弾です。

暗闇を「ひ」めぐり一つの影がある。

「……で、なんでおまわりさんが付きましたか。沖田さん。」

「だあつて、平助の他に頼める人がいないんだもん。」

黒い影の一つはやれやれ、と息を一つ吐くと歩く速度を少し速めた。
「確かに原田さんでは周りに広まってしまいますし、永倉さんでは
彼の正義感にあえなく玉碎でしょうねけど……。」

そうでしょう、そうでしょう、とこの風に沖田さんと呼ばれたもう一つ
の影が動く。

だが、先ほどの影は急に止まるといつも一つの影にビシッと指差して
言つた。

「でも、不本意です！ よりこもよつて、なんでこんな夜に探し物
の手伝いなんですかつ！」

大体、今夜は組総出で取り逃がした浪士の探索命令かかってるんで
すよつ。命令無視して探し物なんて、こんなこと土方さんにバレたら
ら……。ねえ、それって明日じゃ駄目なんですか？」

だが、その影は恐ろしげにふるふると頭を振ると囁み付くよつと言
つた。

「私だつて、他のものだつたらこんな急ぎやしないよ一つ。だつて
無くした物が『豊玉句集』なんだもん。どう考へてもヤバすぎ……。
どうしよう、平助えー。」

平助と呼ばれた影はぎょっとした様に硬直した。

「げげつ、なんつーもんを……。沖田さん、それ土方さんに知
られたら間違なく切腹もんですよ。」

「だからつ、魁先生！ 助けて下さーーー！」

「いや、やつこいつといひで魁先生つて、なんか使い方間違つてるし

——

沖田総司にぐいぐい体を揺すぶられ田を白黒させてこる藤堂平助であつた。

* * *

時は幕末、所は京都

はるばる江戸からやつてきた沖田総司と藤堂平助は壬生浪士組の隊士である。彼らは不逞浪士の捕縛を任務としており、今夜は取り逃がした浪士の探索命令が全隊士にていた。

だが、この二人は今京都七条の三十三間堂の中に忍び込んでいる。沖田総司の落し物を探すためである。

さて、その落し物「豊玉句集」とは 鬼副長、土方歳三の渾身の作の句集である。

先日総司が無理を言わせて句集を借りたのだが、それをよもやハ木邸で読むのもまずかるう、と三十三間堂まで持ち出したのがまづかつた。ハ木邸に戻つてから気づくとビックリも甲子が見当たらない！まさか？ 落とした？！

そして前段の会話に至る・・・。

* * *

どれだけ時間が経つたのだろうか・・・。空が白んできているのが隙間から漏れる光で分かる。

「ますいですよ～。もうすぐ夜が明けそうです。」

「どーしょーつつ。このまま見つからなかつたら・・・平助え～。」

総司は青くなつて目が潤んできている。

平助は横の觀音様たちを振り仰ぎぼやいた。

「觀音様たちならその様子を見ていたはずなんですけどねー。句集のありか、教えてほしいもんです。」

その瞬間、觀音様たちの奥がぐらつと揺れた。変な音が一人の耳に入る。

ガサガサ。ガサガサ。

「な、何??」

「平助が変な」と言うから怒つたんだよー!」

「ええつっ?! 私のせい?」

二人は音のする方から思わず飛び下がつて刀の柄に手を掛ける。

が 。
が

「ふあああああ〜。何? 何の騒ぎ??」

寝ぼけ眼で目をこすりながら少年がのそつと一人の前に現れた。手には冊子を持つている。

「あーつつ、豊玉句集 つつーー!」

思わず総司が冊子を指差す。

「うん? ああ、これ? 何か落ちてたんだけど、何? これお前の? ?」

少年は冊子をまじまじと見つめる。

「そ、そう。私のなんだ。」

総司は冷や汗ダラダラである。せつかく田町での品が出てきても、ここで破られようもんならそれこそ取り返しがつかない。平助も心なしか緊張氣味に一人を見ている。

だが、

「あ、そつ。じゃ、返す。」

少年はやけにあつさり言つと、ぽんっと総司の方に冊子を投げた。慌てて総司は句集を両手で掴む。と同時に安堵感が体中に広がつて

思わず床に座り込んでしまつた。

その様子を見て呆気にとられた少年はバツが悪そうに言った。

「それ、そんな大切なもんだつたんだー。ごめん。悪いけど、それ読ませてもらつた。・・・でも本当に顔に似合わないもん書くなあ、お前。」

総司は苦笑してしまつた。これを書いた真の作者を見てもこの少年はきっと同じ感想を言うに違いない。

「あのー、あなたは何でこんなトコにいるんですか？」
平助が怪訝そうに言った。こんな時間にこんな所に隠れた様にいるなんて、ちょっと怪しい・・・まさか今日の探索の相手？！
だが、当の少年はそんな平助の疑惑に気づいているのか気づいていないのか、しれつとしている。

「うーん、どうやら眠っちゃつてたみたいだね。」

「よくここに来るんですか？」

「うん！ この観音様たち、一人一人お顔が違うだろ。この中にすつゞく先生に似ていらつしやるのがいてはるんだ。だからよく来て考へてるんだ。」
先生なりびつされるのかなあ、って。

少年の目はキラキラしている。その目に邪氣はない。

「その先生のこと尊敬してるんですね。」

「もちろん！ 最高の先生だよ！－！」

その時遠くから人の声が聞こえてきた。少年を呼ぶ声にも聞こえる。
少年は声の方を見返して言った。

「じゃあ、僕もう行かなきや。」

くるり、と踵を返した少年に平助が言った。

「待つて下さい。あなたのお名前は？」 私は壬生浪士組、藤堂平助。

「こつちは沖田総司。」

少年は去りかけた足をピタッと止めるといへるゝと振り返つた。
いたずらつ子の様な笑顔を向ける。

「・・・僕は、弥一郎。品川弥一郎。長州藩士だ。」

彼は言い終わるが早いが、脇の扉をスパツと開けた。

朝日が一氣にお堂の中に流れ込む。

観音様たちが一気に金色に光り輝く。

思わずその眩しさに目を手で遮る一人。

気づくと彼の姿はどこにもなかつた。

「・・・やられましたね。」

平助はちょっと悔しそうである。

「よもや長州藩士とは・・・怪しいとは思つたんですけど。」

「まあ、いいじゃない。句集はちゃんと返してもらつたんだし、あいつ、捕縛するほど悪い奴じやなかつたと思うよ。」

総司はくすくす笑つと、平助の背中をぽんつとたたいた。

金色の観音様たちが微笑んでいるように見えた。

* * *

「弥一郎！ あなた無事だつたんですね。やれやれ、良かつた。」

彼らに聞こえていた声の主は長州藩士、桂小五郎であつた。乱暴に

弥一郎の頭を撫でる。

「か、桂さん、よして下さいよ。」

弥一郎は思わず頭に手をやる。小五郎は笑顔で言った。

「観音様たちが助けて下さつたんですね。」

「はい。」

返事をして思わず苦笑した弥一郎に小五郎が怪訝そうな顔を向ける。

「弥一郎？」

「あ、いえ、そこで面白い奴らに会ったんですよ。僕を捕らえるものかと覚悟してたんですけど、別用だったみたいで、ホント面白い奴ら。」

「面白い？」

「ええ、なんか壬生浪士組つて言つてました。」

思わず手が止まる小五郎に弥二郎は氣づかず空を振り仰いだ。

風が小さな旋風を巻いて通り過ぎていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9334f/>

幕末異聞 疾風録5～金色の下の出逢い

2010年10月11日15時32分発行